

新生児・乳児の感覚に寄り添う

北東 功

聖マリアンナ医科大学新生児科

感覚、いわゆる五感とはご存じのように味覚、嗅覚、視覚、聴覚、触覚です。かつて、新生児は痛みを感じていないという誤ったことが信じられていた時期もありましたが、現在では、痛み刺激を代表とするこどもにとってよくない刺激は発達にも悪影響があることや、触覚や嗅覚は新生児期から実はかなり発達しているということが知られています。一方で、母子・親子関係は本来五感や気持ちを頼りに育まれてゆくものですが、感覚的な育児ができない親が多くなっているといわれています。医療従事者もそういったことを大切にしなくなっているようにときを感じることもあります。とはいえ、小さいこどもほど五感を使って生きています。また、こどもに接するときにはわれわれ小児科医も五感をフルに活用してかれらの出すサインを捉える努力をしているのではないのでしょうか。そこで、われわれがこどもに寄り添うために必要なのはわれわれの感覚であるということ、こどもたちの五感の発達にはわれわれが寄り添うことが必要であるということ、の2つの意味を込めて、本特集は新生児・乳児の感覚に寄り添うというタイトルで纏めさせていただきました。

感覚に寄り添うためには、こどもたちの見ている世界や感じている世界がどのようなものなのかを理解することから始まると思いますので、Ⅰ.「感覚器の発生と発達」ではそれぞれの感覚器の発生と乳幼児期までのそれぞれの感覚器の機能の発達について解説いただきました。それらを総括する形で母子関係と五感の重要性について解説をしていただいております。本来であれば感覚は自然に獲得してゆくものですが、都市化してしまったわが国で、こどもたちの感覚を適切に養うことは困難なことになっているのではないのでしょうか。そこで、Ⅱ.「感覚を養う」として、こどもたちとの触れあい、語りかけ、食事、見ることを通じてどのようにこれらの感覚を養えるのかについて解説いただきました。Ⅲ.「新生児・乳児の成育に必要な環境」では、感覚を育むための環境について、家庭環境や病院環境をどのようにするとこどもたちにとって心地よいのか、また、感覚過敏や一部の感覚に問題を有する児にとってどういったものがよいのかについて解説いただいております。

寄り添うというテーマでの執筆をご依頼させていただいたご執筆者の方々にはご苦勞をおかけしたように思いますが、すべての原稿が“感覚に寄り添う”内容となっていると思います。したがって、もちろん医学的にも重要なことが書かれておりますが、われわれの心に訴えかけるような内容となっており、寄り添うというタイトルにふさわしい内容になったと思われました。

こどもの感覚についてまとめた形で専門家に執筆された特集はこれまであまりなかったように思います。日常診療や健診などにおいて、健常児や病児の育児について両親へのアドバイスをしたり、こどもたちの感覚に寄り添うべく、入院中のこどもへの接し方を検討していただいたり、病室の環境調整に利用していただいたりして日頃の診療に役立ててくださると幸いです。